

笑顔になったばかりで表情は曇ってはいるけれど、その存在を私は見出したかった。昨日のことだ。

ある日のこと、私は家の近くを散歩していると、隣近所の家からうるさい声が聞こえていた。憂鬱だなど思いながら聞いていると、両親が自分の息子、娘に対して、言いなりにしたいが、それを二人の子供が抵抗しているというシチュエーションだった。私はどこかそのことに既視感を覚えながら、歩いていく。電信柱の何本かにカラスと青鳥がケーブル越しに何かを話すかのように鳴き声をあげていた。

「なんだか、毎日がつまらないな」

私は酷くそんなことを考えていたなんてって自分に気づいて、世界には何も残されていないのが今ではもう当たり前と為されてしまったのだから、こんなことになるのなら出会いでも求めて繁華街にでも向かうかと思っただけ、自分のことを考えているのはいつだって私のことを嘲笑して、涙を流すことを強制させるのが、いつものことなのだから。きつと自分のせいでもあるのに人は誰だって自分の人生を変えることなんて簡単にはできないというが、それでも楽しいことを考えていたのなら、いずれ世界に文句を言わなければならない。

人のことを考えるのも大変。だけどそれ以上に人は星の数だけいるのだと、終末論を考えているこの世界に何をもたらせばよいのか、今の私には何もできないのだから、考えるだけでも精一杯な気持ちを少しでも教えたくて、散歩で見かけるおじいさん、おばあさんが時々こちら

を見るのだ。綺麗な光が差し込んでいると気づいたとき、もう朝になっているんだという思いが募る。

朝焼けが山間にかかっている眩しい光が私の瞳に突き刺す。紅の空はもう変わり、翠の空が今を以って、私を包み込む。

「大変なことだつてわかっている。それでも私は欲しがる。その記憶、その答え。理を以ってして人のことを理解したい」

私は今、散歩している。

そのことがこんなにも先のことを考えていたなんて、今の私にはわかるわけがなかったけど、あの時教えてもらった言葉は今でも覚えている。それが実現すれば、私は疲れているからだという理由が消え去っていく。それが私なりの幸福論。

「天に還る、これが人の為すべき最大の答え」

私はそのことを胸に、また異世界へと立ち向かう。綺麗事なんて嫌い。だけど、私は知っているから。どこにでもいる人を探してしまうのなら私は私を騙さず、異世界へとまずは行ってみよう。

散歩が終わった。

そして朝焼けが次第に辺りを明るくし始めたのと同時に私の心が躍ったのは気のせいではないのだから。

「記憶の中の手遊びする鳥の鳴き声」

一人でいられるのは辛いけど、気分的には何も変わらないでいた自分が、どうしてもと、答える必要があつたとき、私は何をすればいいのかもわからず答えていた。それがどこまで本当なのかはわからないけど、そして、それがどうしてそんなにも必要なかはわからないから綺麗事をいうことを知つたとき、人の気持ちを理解してほしいと願うのはどうしてだろう。

人は一人を断る。一人でいられることに慣れた人間から見れば、それは自分のことしか考えていないとしか言いようがないものだから。きつとそれは大事なこと。そう思う。

今日はいい天気になってよかった。晴れていて、辺りは夕焼色に染まる黄昏時。私の気分も最高潮。もうちよつとで完成する異世界への入り口。きつとそれだけ大切だつた心も今では理解しているつもり。そして心に映え渡る気分がもう、どうしてもと我慢が出来なくて私は涙を拭いている隣にいる人をじつと見つめているのが大切なんだと思つていたのはどうしてだろうと考えてしまう。私には何もない。私には何もすることが出来ない。ただ、世界のことを考えているのは自分とは違う人なんだと、知つていたから。笑っているのはどうして？ 笑いたかつたのはどうして？ いずれも世界は変わらずに見つめられていた。何もすることができなくなっている自分がどうしても許せなくて、石を投げているのは湖の中にぽちゃんと魚が何匹も

幸せそうに泳いでいるから、それを邪魔したくなつた。

悔しい心は昔からあるものだから綺麗なことを丁寧にすることで今の嫌な気分も消えていく。浄化。なぜかその言葉を思つてしまった。綺麗なこつて何だろうつて思つたりするのもそれはそれでいいのかもしれない。

私はいつも隣にいる人にありがどうと思つていることを伝えたくて、それに、自分の世界を大切にしている人が私の周りには現れていることに気づき、それが嬉しくて、どうして？ と涙を拭いている彼女に笑つていたのは何もできないでいる、自分が大変なんだと思つたからだろう。それがどうしようもなく、それを大切にしてるんだと知つていれば、それだけ楽しいことができると思つていたから。

笑つてよ。笑顔になつて、また会いに来て。

そんなことを言われた気がした。

楽しみにつながることが

それだけ大切だということに

気づく楽しみが

大切だと

信じている

森の中に何かが潜んでいるとの情報が私の耳に入り、それがどこで違ったのかわからず、私はその人にもう一度尋ねる。

「本当ですか？ あの人ならそんなことしないんですが」

「わしもそう信じたいのだが、あのお方なら、何かをしでかす息子を止めないだろうに」

「そうですか。ならあのお方に会いに行ってみたいと思います」

「ご足労おかけするな、いつも」

「いえいえ、これも異世界の構築のためなので。世界の崩壊が始まったら酷いですからね」

その人に挨拶をして森の中に入っていくのを何人もの人が怯えながら夜空を見上げている。

獣の類が森の中を跋扈するのならわかるが、それでも綺麗事を唱えるなら、この世界を天に還らすとき私はここで最後の世界を看取ることができるので努力していると、誰にも言うていないのだ。私は何も知らずに答えているのはどこにもいないと信じているし、その代わりと言っては何だけど、あのお方には少しだけ見られたことがあつてすぐ消した情報がそれだけ。

世界の崩壊。

そしてこの世界にまた新しい生き物が増えたり、新しい植物が増えたりと何もしてないのにあつたのならそこに世界を導かなければならなかった。私は何も知らないし、何もできないで

いる、そんな人を演じている。その内あの方にもそう思われるようになり、あの方が言ったと誰もが信じている。私は嬉しくて嬉しくて仕方なかった。私のことを誰も信用していないというプレッシャーからの解放、そして世界の真実を知っているのは私だけだということ。それがどうしようもなく嬉しかった。

一人でこの世界か異世界を選べ、そこでずっと暮らせる。わたしがいなくなれば、何もなくなる世界の中で綺麗事が叶う。

その理想に私は喜んで身を投じるつもりだ。私の故郷はもうない。綺麗なことをしていても何もできずにいる昔の自分とはもう違うのだ。

ただ、今の世界のことと誰かが異世界の入り口を見せているのがいるらしいとそのことに不安を感じ、森の中へとついに入る。

これから始まる戦いに身をひそめるのは私だけだったら勝てないから。私だけだったら何もできないから。

だから楽しみでもある、探索の代わりに私はこのまま異世界の中へと入っていくつもり。

土道を歩いていく。ぬめりのない足元に何も無い林道。私の傍には一つだけのあの人を持っている杖。私を導いてくれた、この杖がある限り、私は歩いていける。たとえば、この世界が崩壊しても。たとえば、異世界に誰もいなくても。

私は鳥の声を聴いているだろう。

理想郷を創ったのだから。

記憶の中の手遊びする鳥の鳴き声は私を呼んでいるような気がして、急いで異世界の空間に入っていく――。

人の気持ちかわからない
生き物の本能がわからない

ただ

信じたものは ひとつ

答えがそこにあつたから